
危険な太陽

袈久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

危険な太陽

【Nコード】

N4140C

【作者名】

袈久

【あらすじ】

素直になれずぐれてしまう大。学校では周りからは怖がられてしまう。そんな大を支える幼馴染みの里香。大は無愛想な性格で里香に冷たく接してしまうが心から大事に思っている。喧嘩と恋愛と友情の間で本気で生きる不良×恋愛小説。

1章～4章（前書き）

この物語に登場する人物、団体は完全な空想です。実際におられる方とは一切関係しません。またこの物語をお読みになって不快になられても一切責任はとりません。以上のことを了解して下さいの方のみお読み下さい。

1章〜4章

一章【出会い】

大がまだ5歳の時。田舎に住んでいた大の家の隣りに大阪の町中から引越してきた家族がいた。

『隣りに引越してきました。安西ですう。よろしくおねがいしますう。』

どうやら安西というらしい。大の母親に関西弁で挨拶しているのが大にも聞こえてきた。

大はやんちゃで自然で遊ぶのが大好きな少年だった。

ある日：大が暇をもてあましづらぶら歩いていると、一人の小さな女の子が野良犬に追いかけられていた。

『キヤー／＼／』

泣きべそをかきながら逃げる少女を見て大はあきれてしまい、大きな棒を持って犬の頭を思いっきり叩いた。

『キャン／＼…』

犬はよるめいて逃げて行った。大は一目でこの少女が安西の娘だと思った。

まずこの辺の子供は女でも犬に追いかけて泣いたりしない。野良犬がいるのは当然のことだ。

大は何も言わずにその場から立ち去ろうとした。

『ちよつとまってえ！！』

少女はまだ半分泣きべそをかきながら大に近付いて来た。

別に忙しくもなかったが大は女と話すのが苦手だったので無視して歩いた。

『ねえ、待っててばあ！！うちの名前は安西里香や。名前教えてえ。』

無視する大に里香はひるまず着いて来る。大はうざったくなり走って家に帰った。

次の日。

大は友達と近くの川に釣りに出かけた。5歳とはいえ釣りの腕前はなかなかのものだ。

『やっぱり大君はうまいな。かなわんよ。』

『そうか？』

大は地元では餓鬼大将のようなもので同世代の男の子からも一目置かれる存在だった。

『大って名前なんやあ。』

後ろの草むらから不意に里香が現れた。

大はびつくりした。

『おまえなんだ？今日もおっかけてきてたわけ？』

大がめんどくさそうに里香を見た。

『なんや。レディに対してそんな言い方ないやろ。』

里香はニッコリ笑い大に近付いた。そして思いも寄らない一言を口にした。

『うち、大に惚れたねん。うちと結婚してえ。』

『はあ？』

里香も5歳なのだが、かなりませていきなり大にプロポーズしてきた。

『うち本気で昨日一目惚れしてん。』

里香はちよつと頬を赤くして大を見た。

『おまえさあ…ふざけるのは顔だけにしとけよ。』

大は里香を犬から助けたことを後悔した。
そしてまた逃げるように家に帰った。

『うちあきらめへんからなあゝ！！！』

里香は走っていく大の背中に向かって大声で叫んだ。

その日以降、里香は大のあとを追いかけた。大も痺れをきらし、いつからか里香のことを近くにいても自然に想うようになっていた。

二章【告白】

大と里香が出会って10年の月日が流れた。

大と里香は高校受験を控えていた。

『なあ？大？うちあんと同じ高校行こうと思ってるねん。』

学校の帰り道。相変わらず抜けない関西弁で里香が話す。

『はあ？おまえ止めとけ。俺、鬼多高だぜ？里香の頭だったらもつといいとこ行ける。』

大は相変わらず無愛想な性格だったが里香にだけは少し心を開いていた。

学校でもすぐ喧嘩をして問題を起こす大は卒業もやっとできる程だった。

一方里香は明るい性格で友達もたくさんでき、背が高くすらっとした体型に茶髪のロングヘアー、ちよつと黒く焼いた肌でいつも化粧をばっちりした、どこから見てもギャルだった。だが頭は良く問題も起こさなかった。

そもそも茶髪にしたのも大の彼女なんやからこんくらいはせんとかなんとか言い染めたのだ。

『どうせ高校行ったらこの村でらなあかなるやろ。そしたら大と離れ離れになってしまうやんか。』

『いいじゃんよお…別に…』

大は口ではそう言ってたが心では里香と離れることに抵抗を感じていた。10年間もずっと自分を追いかけて回してきた里香がいなくなるのは信じられなかった。

『いやや!-!』

『あつそお。』

半分涙目になりながら言う里香を見て大はフンツと笑い吸っていたタバコを道端に捨てた。

なんだかんだで里香は大が行く鬼多高に進路を決定した。親の反対も押し切り、担任教師の反対も押し切った。

それだけ里香にとって大は本当に大切な存在だった。

一目惚れって本当にあるんだと心から思った。

冷たくて無愛想で頭も悪くて……だけどどこか優しい大を愛していた。

大がいない生活なんて里香にとってはあり得なかった。卒業が近くなった中学校では告白ブームだった。

大は相変わらず一日中喧嘩をしては教師に説教される日々が続いていた。

『鷹邸！！おまえ今度なんかしてかしてみろ！！卒業できなくなるぞ！！！！』

大は特別指導室で説教されていた。

『殴られて殴りかえしてなにがわりいんだよ！！』

『おまえがそういう性格だからすぐに不良に絡まれるんだ！！』

大は地元で喧嘩も無敵だった。自然の中で育った大は人並み外れた運動センスをもっていた。

そんな大を倒せば自分が最強になれると想う不良たちはうじゃうじやいた。

大は説教の途中に腹を立て指導室を飛び出して屋上に出た。

たく…むなくそわりいぜ…

『俺と付き合ってください!!!』

屋上の隅で男子生徒がまさに告白をしていた。大はその光景を見て持っていたタバコを床に落としてしまった。

告白されている相手はまぎれもなく里香だった。

フンツ…何動揺してんだ…別に俺と里香は付き合ってる訳でもねえし…

大はタバコを拾い火をつけて里香から見えないところでタバコを吸い出した。

心では里香と自分はなんでもないと思っても、大は耳を済ませて告白の結果を聞いてしまった。

『ごめんなさい。うちあんたとは付き合われへんねん。』

里香は告白を断った。これには大も驚いた。なぜなら里香に告白した相手は校内で1、2を争う美男の田中だったからだ。

『なんで？せめて理由きかせて。』

田中は生まれて初めてふられたらしく間拔けな表情で里香に聞いた。

『うち好きな人があるねん。世界一いい男なんや。田中くんも知ってるやろ？』

『鷹邸くんのこと？本気で好きだったの？』

里香が大のことを好きというのはだれもが知っていたが、美しい容姿と明るい性格の里香はやはりモテた。

『当たり前やん！！』

里香はそれだけ言うと大が聞いていることも知らず屋上から降りていった。

…あいつばかだな。

大はフンツと鼻で笑った。だがなぜか顔は笑顔になった。心のどこかで里香が他の男のものになるのを怖がっていたのかもしれない。

『鷹邸先輩／＼／』

大が学校から帰ろうとすると後ろから女子生徒に呼び止められた。

正直大は驚いた。学校の連中の大半は大のことを怖がって近寄らないのに、里香以外の女子に話しかけられたのは初めてだった。

大が振り向くと小柄な女の子が下を向いて立っていた。どうやら2年生らしい。

『なに？』

大が無愛想に言つとその子は一步大に近付いた。

『ずっと前からあたし先輩のことが好きでした。あたしと付き合つて下さい。』

大は内心慌てた。女の子に告白されるなんて初めてだ。

だが実際大は密かにモテていた。キリツとした切れ長の目に高い鼻。上品な唇。180cmの長身のわりにしっかりついた筋肉と広い肩幅。

ただ危険な感じがするので好きになっても声をかける勇気がない子が多く告白されずにいたのだ。

告白された瞬間大の頭に里香の顔が浮かんだ。

『ごめんな．．俺付き合えねえ．．わりい』

大はそれだけ言って去ろうとした。

『せめて．．せめて先輩を好きだった証が欲しいので．．いつもつけてるそのピアスどれかくれませんか．．？』

大が再びその子の顔を見ると涙を流していた。

『いいけど．．』

大は自分の耳にはめていたピアスを一つ外すとその子に渡した。

『ありがとうございます。』

その子はそのまま走っていった。大は少し考えさせられた。女というのは話したことさえない男にふられてあんなに悲しむのかと。

大はその子のことを考えながら女について考えてみた。

今し方俺は女を泣かせてしまった。

大は自分の母親のことを考えた。大の母親は実は大が9歳の時に死んだ。

気の強い母は近所で酔っ払い同士の喧嘩を止めようとして刺殺され

た。

その母がいつも口癖のように大に言うことがあった。

『大、男はね、女よりも強い。分かるね？大人になればもっとよく分かる。なんで男の方が強い分かるか？』

まだ幼い大には分からなかった。

『なんでだよ？』

『それは男が女を守るために強いんだ。だから母さんはおまえが女を泣かせたら許さない。』

いつも笑っていた母がそう言う時だけ真顔になっていたのを大は覚えていた。

『泣かせねえよ』

『ならいいんだ。』

そう言って母は大の頭を撫でた。

大には父親は憎い存在でしかなかった。いつも母親に暴力を振るっていた。だから母親も大に女を泣かすなと言ったのかもしれない。

大の母と父は父が20歳、母が16歳で結婚している。いわいるできちゃった結婚だ。

しかし、大が生まれてからは父は他に女をつくるようになった。たまに家に帰ってはまだ幼い大に暴力を振るってはストレスを解消しているようだった。

母は大をかばい殴られ蹴られるようになった。なぜ父がこんな風になってしまったのか分からなかった。

母は父がたまに家に帰って来ると大を外に逃げさせた。

大は母が家の中で殴られている音や両親が大声で喧嘩しているのを聞いて泣いていた。幼い大にはあまりに悲しすぎる家庭だった。

大が5歳の時とうとう母と父は完全に別居した。大はそっちの方がよっぽど良かった。

母の父から殴られてできる痣はまたたくまに消えた。

だが母と父は離婚はしなかった。明らかにお互い冷めているのに世間体を気にしていたのだろうか。

しかし母との暮らしは楽しかった。父は県外に住むようになります。まず父の恐怖を感じなくて住むようになった。

母はまだ21歳だったので体力はあったようで、建設業者の雑用のような仕事をしていた。大も何度か母の仕事場に行ったことがあった。

なんと母は少しでもお金がもらえるようにと男の大工達と一緒に現場で力仕事をしていることもしばしばあった。

大はその光景を見る度に早く大人になって母を助けたいという気持ちが大きくなった。

だがその夢は叶わなかった。母は25歳でこの世を去った。

大は一つ空いた耳のピアスの穴を撫でながら母のことを思い出しつつ家に帰った。

大の家は古いマンションの一室だった。そこで母の姉、つまり叔母とその娘と暮らしていた。

叔母も旦那とは別れていた。

『ただいま。』

『大くん、おかえりなさい。』

叔母はまだ33歳で。娘つまり従兄弟の亜季は小学生だった。

叔母は大が帰って来るとちゃんと玄関まで来て迎えてくれる。

大がどんな問題を起こしても何も言わず優しく接してくれる叔母は母とかぶって見えた。

貧乏だったことは確かだが大は父親と暮らすのは嫌だった。母が死ぬまで父と離婚しなかったせいで父が大を引き取ると言い出したのだが、叔母が当時9歳でまだまだ学費もかかる大を強引に引き取った。叔母は父がどんな人間か知っていたらしい。

大は自分の部屋に入りベッドに横たわった。なぜか心臓がまだ強く鼓動している。人に告白されることはこんなに緊張することなのかと考えた。

今まで恋愛に興味などなかった。生きるだけで精一杯だったからだ。中学校に入ってすぐに朝は新聞配達、学校から帰ったら地元の建設業者に行き材木運びのバイトをした。

体はへとへとだった。叔母はそこまで働いてくれなくてもいいと言ってくれたが、父親がいるのに叔母に引き取ってもらうのはわがままなような気がした。だから体が持つ限りバイトをして給料は全額叔母に渡した。

今日はバイトが休みだった。久し振りの休みだ。2週間に一回休みがあればいい方だ。

卒業式まであと3日だった。大はいろんなことを思い出した。しかしいくら思い出に浸っても喧嘩ばかりやってた気がした。少し笑えた。

俺は何やってたんだろ…3年間バイトか喧嘩しかしてねえ…

コツコツ

大の部屋をノックして叔母が入って来た。

『大くん、あと3日で卒業だけど、大事な話があるの。』

『何ですか？』

大は嫌な予感がした。良い知らせだとは思えなかった。

『私…再婚しようと思っの。』

叔母は少し照れくさそうに前髪をかきあげながら言った。

大は内心ほつとした。悪い知らせではない。叔母はまだまだ綺麗だし再婚は当然の話だと想った。

『叔母さん…おめでとう!!! 幸せになってください。』

大はここまで育ててくれた叔母の幸せを想い、心から幸せになってほしいと願った。

しかし…大の頭には一つ不安が過ぎった。叔母が再婚するとなれば当然親戚でもない自分は邪魔になる。

『叔母さん…俺もう義務教育終わったんだし…一人で住むよ…!!』

『大くん…』

叔母も大の意見に反対はしなかった。叔母は小さくごめんねと呟いた。

大は少しシヨックだった。一緒に住もうと言ってくれる気がしていた。いや…離れて暮らすのが当たり前と想っていてもやっぱり叔母なら止めてくれると想ったのかもしれない。

その光景をひっそりと亜季が泣きながら見ていた。小さい時から大と一緒にくらしてきて本当の兄のように思っていた。

大はその場に正座をし叔母に頭を下げた。

『お世話になりました。』

4日後大は家を出た。

三章【高校入学】

大が越してきたマンションはびっくりするくらい狭かった。叔母から毎月仕送りが来るが、せいぜい5万円がいいところだ。どうやら再婚した相手もそれほどお金持ちではないしかった。寮に入ればもっといい部屋で安いだろうが、誰かと住むなんてことが大にできるはずがない。

もちろん5万の中から高校の授業料も払わなければならない。家賃はなんとか3万円のところを借りた。

大はもちろんバイトをすることにした。学校帰り、毎日バイトを探して歩いた。もちろん里香は大にくっついたまま離れない。

『なあ…大はどんなバイトしたいん？』

棒付飴を舐めながら里香が聞いてくる。

『時給が高けりや何処でもいい…てかなんでおまえついてくるわけ？』

『大の側にいたいから！！』

『意味わかんねえ。』

高校に入ってから2ヶ月。里香はますます大人っぽくなっていた。

腰まである髪には軽いパーマをあてている。

スカートはミニで細く形の良い足が見え隠れしている。

大は商店街に並ぶ店を一件一件見た。まず大は接客する作業は無理だと思った。

大が自身があるのは体力だけだった。だがなかなかいいバイトは見つからない。

『大？』

『なんだよ・・・』

大はめんどくさそうに返事した。

『大は辛くないん？叔母さん再婚してお金苦しいやろ？高校生でこんなに苦しい人いないんやない・・・？』

『だからなんだよ？』

里香の顔は本気で心配しているようだが、大は貧乏なんて怖くなかった。まだ叔母から毎月5万円もらえるくらいでしたと思った。

だいたい中学校の時だって寝る間を惜しんでバイトをした。人より苦労してとは思わない。たまたま親父に恵まれなかっただけで、それでもお袋には恵まれていたからそれで良しとする。

『大…うちなんでも協力するから…』

里香はいつになく真面目だった。こんなに悲しそうな里香の顔なんて見たことあっただろうか…。

『おまえがそんな悲しい顔すんなよ。俺はなんも不幸だと思ってねえし、だから苦しいなんて思わねえよ。』

大は自分が焦っていることに気付いた。里香の悲しい顔を見て心が痛かった。とっさに心配をかけたらいけないと思った。

里香は大の言葉を聞いて嬉しそうにほほ笑んだ。

『やっぱり大は強い男なんや！！！！惚れ直したでえ！！！！』

『別に惚れなくていいって…』

大は真顔でそう言ったが、内心は里香の心配が嬉しかった。この世で自分のことを心配してくれる人間なんて里香以外にはいない気がした。里香は舐め終わった飴の棒を公園のゴミ箱に捨て、先々歩いて行く大を追いかけて小走りした。里香の顔は笑顔だった。

日が沈み始めた。

『里香…もうおまえ帰れよ。暗くなるぞ?』

『うちがいないと寂しいくせに何言つの?』

『勝手に言っとけ。』

里香は暗くなっても大につきっきりでバイトを探した。

すると前方に大型デパートが見えた。入口にはバイトを募集しているという内容の文章が書いてある紙が貼ってあった。

仕事内容は商品運びらしい。大はその紙を読んで店内に入って行った。

里香も大の後ろからついていき店内に入った。

『すみません・・・バイト募集しておられるんですか?』

大が中央カウンターのようなところにいる中年の女性に聞いた。

『兄ちゃんバイトしたいの?』

『はい!!雇ってもらいたいんですが...』

『こっちにどうぞ。』

中年の女性に連れられて大は店長らしき人の前に通された。里香は洋服売り場で待っていることにした。

店長は50過ぎくらいのおじさんだった。大は店長に一礼し働きたい旨を伝えた。

どんな質問をされるか緊張した。なんと言っても鬼多高というだけで今まで断り続けられた。それだけ鬼多高は荒れていたのだ。

しかし店長の面接はシンプルなものだった。

『君…体力に自身はあるかね?』

『はい！！なんでもやります。』

『そうか。分かった。じゃあよろしく頼むよ。』

大はその一つの質問で採用された。時給もなかなか良かった。大は里香のいる洋服屋のある方向に歩き出した。

里香も喜んでくれるだろう。大は、なぜか里香を安心させたい気持ちでいっぱいだった。

大は少しためらいながら女物の洋服屋に入った。

里香を探すがなかなかいない。里香が大を残して帰るなんて今まで

一度も無かった。おかしいなと思った。

何か嫌な予感がした。大は店の中をくまなく探した。その様子を見ていた二人の女子高生が大に近付いて来た。

『もしかして…彼女探してますか？』

里香は彼女ではないが他人から見たら彼女に見えるだろう。そう思い頷いた。

『彼女っていうかまあ…』

『さっき鬼多高の制服を着た長髪の可愛い女の子があたしたちの代わりに連れていかれちゃって…』

『はあ？』

大は意味が分からなかったがやばいことは確かだった。

その二人が言うには店内にこの町では噂になるくらいの不良3人組が来たらしい。

そしてその二人が3人組に絡まれて困っていると里香が中に入ってその3人組にやめろと言ったらしい。

すると3人組は里香を連れて外へ出て行ったらしい。

『すいません．．．すいません．．．』

二人の女子高生は大に謝り続けた。

『謝らなくていいよ。じゃあ．．．』

大は店を出て走り出した。口では謝らなくていいなんて言ったが、心臓は爆発しそうだった。里香にもしものことがあったら…。

宛などないがとにかく走った。

商店街を走って行くと5人くらいでたまっている俗に言う不良少年達のグループを発見した。

二人の女子高生が言うには里香を連れ去った3人組はこの町では噂になるくらいの不良だ。不良は不良に聞くのが手っ取り早いと大は思った。

大はたまっているグループにすごい勢いで近付いて言った。

『おい…この町で噂になるくらいの3人組の不良って誰だ？そいつらどこにいる？』

『なんだてめえ???いきなり突っ込んで来て。礼儀がなってねえんじゃないねえか?』

リーダーらしき男が大を睨みながら言った。

『それどこじゃねえんだよ。後で何発でも殴られてやるから教えてくれ。頼む。』

大はすごい形相で言った。そのリーダーらしき男も圧倒されたのか3人組の居場所を教えた。

『恩に着るぜ!!』

大は必死に走った。教えられた場所は商店街から少し離れた裏通りの廃墟のビルの地下だった。

確かに薄暗く不良がたまりそうな場所だった。

大はためらわず乗り込んで行った。薄暗い部屋の中で3人組は酒を飲んでいた。ソファに里香は寝かされていた。

大は自分の中の何かが切れる音を聞いた。

3人組はまだ大が侵入したことを知らないらしい。

大は低い声で怒りを露にした。

『おい。てめえらその女返せや。』

3人は一斉に大の方に振り向いた。金髪に、剃り込みに、オールバックに3人ともいかにも不良ですみtainな出で立ちだ。

『ヘッヘッへ…兄ちゃんまさかこの子の彼氏?』

『泣かせるねえ… たった一人で助けにくるとわなあ…』

里香をよく見ると口元が真っ青になっていた。明らかに殴られて気絶しているようだ。

大は3人の挑発なんて頭に入ってこなかった。そのくらい怒っていた。

『てめえら里香に何した？』

『せっかくいいことしてやろうと思ったたら大きな声で泣きながら抵抗してきたから一発殴って静かにしてもらっ！！！！！！／／／／／グホッ…ッハ』

オールバックの男が言い終わる前に大は男の腹を一発殴った。幼少期からの経験からどこを殴れば致命的に効くか知り尽くしていた。事実オールバックの男は床に倒れ込みのたうち回った。

オールバックが殴られて慌てて金髪の男がビール瓶で大の頭を殴った。物凄い音がしてビール瓶が割れた。

大はぎろつと金髪の男の方に振り返った。額から血が流れていたが、まったく効いてなかった。

『…なっ…何!!!!!!?』

ビール瓶で殴られることなんて初めてでは無かった。長年の喧嘩歴から瞬時に急所を外す術を知っていた。

怯む金髪にはハイキックを一発見舞った。

金髪はよろけて床にぐったり倒れた。

残った剃り込みは、大の強さに驚き逃げようとしたが、大は剃り込みの腕をがっちり掴んだ。

『馬鹿かてめえ…逃げられるとも思ってたのかコラ…』

『ゆっ…許してくれ。どうか…暴力だけは…』

『あん？てめえ何言ってるんだ？』

剃り込みは確かに震えていた。しかし里香はもっと怖い思いをしたに違いない。

『暴力？てめえら女を殴ったんだろ？まあいい。てめえみたいなざこ殴る気もつせる。』

大はまだぐったりしている里香を横に抱きあげ廃墟を出た。

商店街に出て病院を探した。周りの人は大をじろじろ見た。それもそうだ。顔が血みどろで女を抱き走っているのだ。

大が走っているうちに里香は意識を取り戻した。

ぼやつとした頭で目を開けると必死に自分を抱いて血みどろになりながら走っている大の顔が見えた。

大…。

『大…』

『里香？』

大は里香が目を覚ましていることを確認し安堵したような表情になった。

里香はもう大丈夫だと言って自分の足で歩き出した。もうすっかり夜になっていた。

二人は公園のベンチに座った。大はまだそわそわしていた。里香を病院に連れて行くというのだ。

『だから、大丈夫やって！！！！大、心配しすぎや！！！！』

『馬鹿かおまえ。殴られてこんなに痣になって……気絶してたんだぞ？病院いなくてどおすんだよ……』

『大……助けてくれたんやね。』

いきなり里香は大の目をまっすぐ見つめて言った。

大は馬鹿や。自分は頭から血流してるのにこんな痣くらいで大騒ぎするなんてほんまアホやわ。

里香は大の血が付いている顔を制服の袖で拭ってあげた。

『…おまえ何してんだよ…制服汚れるぞ?』

里香はそんな言葉お構いなしに制服で大の顔を拭き続けた。幸せそうな顔で…。

大の髪は近くで見るとすぐ伸びていた。前髪は目にかかるくらいだ。おしゃれで伸ばしている訳でなく散髪しに行く暇がないだけだと分かっていても里香にはかつこよく見えた。

『大? 傷痛くないかあ?』

里香はまだビール瓶で切れた大の頭の傷を見た。

『痛くねえよ。おまえ人の心配してる場合かよ。』

大は無愛想で里香のことを大事に思っけていても優しい言葉を投げ掛けることができなかった。

『里香？怖かったか？』

大はとつさに里香に聞いた。よく考えれば怖いことだろうと思った。男3人にたった1人でさらわれたのだ。

里香は大の顔を拭う手を止めてベンチに座り黙り込んだ。下を向いて小さく震えた。微かに泣き声が聞こえた。

一時して里香は大の胸に顔を埋めて泣き出した。大は里香の頭に顎をのせて優しく里香の背中に手を回して抱き締めた。

10年以上の付き合いだが大が里香を抱き締めたのは初めてだった。

里香は大の体温の温もりを感じて泣きやんだ。ほのかに香るタバコの香りでさえ里香の傷ついた心を癒した。

『里香…もう心配させんなよ。いちいち喧嘩すんのだりいんだからな?』

大はまたいつも通り冷たい口調で言った。しかし里香はその言葉に隠された深い優しさを感じ取った。

『分かった。ごめんな…』

里香は大に抱き締められていることが夢じゃないことを祈った。心臓がトクトクと早く動いているのが分かった。

大はその日里香を家まで送ってまた古いマンションに帰ってきた。

…そういえば俺バイト決まっただった…。

大はバイトのことをすっかり忘れていた。シャワーを浴びてから髪

も乾かさず布団に入った。里香を抱き締めたことを思い出すだけで
恥ずかしさが込み上げてきた。

俺なにやってんだろ…。

大は里香に対する甘酸っぱい想いをいただいたままぐっすりと眠っ
た。

次の日大が学校に行くと周りの生徒に避けられている気がした。入
学した時から大の喧嘩の強さは生徒の間にも広がり話しかけてくる
生徒はほとんどいなかった。

だが今日の雰囲気はそんなものではなかった。

大はわけも分からず気が乗らなくなったので授業を抜けだし屋上に行くことにした。

屋上に行くまで女子トイレがあるのだが、そこから話し声が聞こえてきた。また授業をさぼっている生徒が世間話しでもしているのだろうと想った。鬼多高では当たり前前の光景だ。

『知ってる？うちの学年の鷹邸っていう怖い人？』

『知ってる！！！！超かっこよくない！！！！？』

『あたしも顔とかかつこいいと想っただけど、昨日ね…あの3凶を一人で潰したらしいよ。』

『えっ！！！3凶を？まち？3凶より強いなんて信じらんない！！！！！！』

『でしょ？なんか怖くて近寄れないよね。確かにかつこいいけど…』

どうやら昨日里香をさらった3人組は3凶と呼ばれていてかなり有名らしい。地元最強と名乗っているらしい。

大はあつと溜め息をついて屋上に上り煙草を吸った。

怖いか…俺が？

大は中学の時から周りに怖がられているのが分かっていた。

喧嘩を重ねれば重ねる程周りが離れていく気がした。

それでも喧嘩は辞められなかった。ある意味途中から相手は誰だつてよくなっていた。殴り合うという動作が好きになっていた。

中毒のような物だ。殴り合うと自分が生きているという実感が沸く。

そんな生活を送るうちに喧嘩では自分の右に出るものはいなくなつた。

大は煙草を一本出すとふかしだした。すると後ろから誰か近付いて来る。

大はその気配に気付き後ろを振り向き睨んだ。

『フンッ…そんな怖い顔しなさんなッて』

『おまえは・・・!!!』

大の方に近寄って来たその男は昨日商店街にいて3凶の居所を教え
てくれた不良のリーダー的な男だった。

『おまえもこの高校だったのか...』

『まあな。一本もらうぜ?』

その男は大の煙草を一本とって吸い出した。

『昨日は彼女助けようとしてたんだな...』

『彼女じゃねえよ・・・』

『その割りにはすごい形相だったぜ。てめえ?』

大は久し振りに里香以外の同級生としゃべった。

『おまえ名前なんていうんだ？』

『鷹邸大だ．．おまえなんてんだ？』

『俺はなつめ 翔しょうだ。』

翔は身長は小さく髪は坊主に近く金髪だった。いかにも怖いお兄さんだ。まあ正確に言えば怖い小さいお兄さんだが。

『なんかよ…俺おまえみたいな性格好きなんだよな！！まだ会って一日だけだなッ！！！！ハハ．．』

『!!!?!?』

大はびつくりした。自分の性格が好きなんて言ってくれる人がこの世にいるんだなと思った。

大は照れ隠しにまた青空を見上げた。翔は相変わらずニコニコして大を見る。

『そういえばよ．．あの彼女なんて名前なんだよ?』

『だから彼女じゃねえよ!!!』

『まあまあ...いいじゃんか!!!』

『...里香だよ。』

『里香ちゃんかあ……！！！！可愛い子だなあ。』

翔は里香の顔を見たことがないはずだった。大は不思議に思った。

『おまえ……なんで里香の顔知ってただよ！！！！？』

『あっ！！！！いつけねえ口が滑った。』

翔は苦笑いをしながら口に手を当てた。

『実はさあ！！昨日気になって大の後をつけたんだよ。まあこういつちやあなんだが、凶に一人でかかるなんて無茶だと思って……』

『はあ？』

つまり3凶と大が闘ったあの時、翔は密かに見ていたのだ。

『俺おまえみたいに強い奴初めて見たよ！！！！一人で3凶に勝てるやつなんていないと思ってたぜ……』

翔はそういつと制服をめくりあげ脇腹を見せた。

『どうしたんだよこれ……』

翔の脇腹にはナイフで切られたような傷跡があった。

『去年3凶にやられたんだ。夜に一人で帰ってたところをグサツとな．．ハハハッ．．』

翔は傷跡を撫でながら笑った。3凶はこの町で自分達が最強だということを知らしめるためこの地区でぐれていた翔達のグループを襲ったらしい。

『痛かったろ？さすがにその傷跡じゃあ馬鹿な俺でも軽傷じゃねえことくらい分かるぜ？』

『彼女を守りたかったんだ。くさい台詞だと思うだろ？へへッたまたまその夜彼女連れててな．．でも俺はおまえみたいに守れなかった．．』

翔は空を見上げて悲しい顔をした。大はその悲しさが伝わってきてそれ以上なにも聞けなかった。

翔の彼女は3凶にレイプされていた。

翔の彼女は遥といった。

悲しいことに遥はそのショックで今でも立ち直れていなかった。男を見るとそれだけで体が震える。

そのせいで男女共学の高校には行けず今は部屋に閉じこもっているのだった。

翔はそのことを大に言った。

『遥のことを話したの大が初めてだぜ…』

『そうか．．』

『昨日おまえが彼女を助けたい気持ちがつづげえ伝わってきたよ。遥みたいになつたら取り返しがつかなくなるからな…』

『ああ…』

大は決まり悪そうに翔を見た。翔の悲しみがしみじみと伝わって来たのだ。

昨日会ったばかりの自分にここまで打ち明ける翔の気持ちが大には分からなかった。

それだけ翔は大に魅力を感じていたのだろう。

大も最初はただの不良と思っていた翔を少し見直していた。

一緒に話していてこんなに意気投合する奴は大の中ではなかなかいなかった。

『大！！アド教えろ！！』

翔は自分の携帯を取り出して大に聞いた。

『わりい。俺携帯もってねえから。』

大はきっぱりと言った。翔はばつがわるそうな顔をした。

『そんな顔すんなよ．．はつきり言つて俺は貧乏もいいとこだし、親もいねえ。でも別に哀れまれる程じゃねえぜ。親父と暮らすくらいなら一人の方がましだからな。』

大は今までの自分の境遇を翔に話した。母が死んだこと。父が暴力的だったこと。中学の時に喧嘩とバイトばかりしていたこと。

翔は大の話しを黙って聞いていた。翔は内心驚いた。普通の10代の若者がここまでたくましく生きれるのかと思った。

『大もいろいろあつたんだな…』

『まあな…。でも悪い人生じゃねえぜ…。自由だしな。』

大は吸っていた煙草を捨てた。授業終了のチャイムが鳴った。大と翔は二人で屋上から降りていった。

靴箱のところでいきなり翔が口を開いた。

『大の今までの人生はすげえ厳しかったと想った…だけど大が悪い人生じゃないって想えるのは彼女のおかげだと想うぜ…。?』

翔が真剣な顔で言ったので大も一瞬黙ってしまった。

『だから、別に里香は彼女じゃねえよ！！！』

『それにしても美人だよなあ…そんなこと言っていると他の男にとられるぜ？』

大と翔はどちらともいうことなく一緒に帰っていた。

『大！！！！！！』

二人に向かって里香が走って来た。もうすっかり元気になっているように内心大は安心した。

『大！！！！先に帰るなんてひどいやん！！！！』

『なんでてめえにいちいち報告しなきゃいけないんだよ……』

大がブツブツ言っていると里香は翔の方を向いた。

『大のお友達？大に友達ができるなんて奇跡やなあ……』

『翔だ。よろしくね。』

『うちは里香。よろしくなあ。』

里香は満面の笑みで翔を見た。

流れでとうとう3人で帰ることになった。

本当は翔は空気を読んで先に帰ると大に言ったのだが、大がその必要はないと言ったのだった。

大にしてみれば昨日のことを思い出すと里香と二人になるのは恥ずかしかった。

三人は大のぼろアパートに上がり込んで世間話に花を咲かせた。

『里香ちゃん本当に可愛いのになんで大なんかおっかけまわしてんの？こんな無愛想でキレイやすい男なのに』

翔が大の肩に腕を置きながら言った。

『だれが無愛想だ・・・』

『うちは大一本やねん。理由はないよ。こんないい男おらへんもん。』

里香はビールを飲みながらまた大のいる前で恥ずかしいことをスパッと言う。

『この幸せもの!!』

翔は大の頬をつついて冷やかす。

『だいたい誰も付き合ってねえっての・・・』

『またまた照れ隠しはいいからさあ。』

翔はぼんぼんと肩を叩いてカキピーを食べた。もう時計は8時を回ろうとしていた。

『俺そろそろ帰るわ・・・!!!!』

翔はいきなり立上がり玄関から飛び出して行った。わざと大と里香を二人きりにしようとしたのだ。

『待てよ．．！！』

『じゃあな．．！！また学校で会おうぜ！．．！』

ガチャン

翔が玄関の戸を閉めたのでいよいよ大のアパートには里香と大二人きりになった。

里香はわざと気まづくならないように茶碗洗いをしだした。

『里香．．いいよ。茶碗なんか洗わなくて。自分でするからよ。』

里香は何も言わずに茶碗を洗い続けた。とうとう茶碗を洗いきり里香は大の迎えに座った。

『大…昨日はありがとう。大に助けられてうち幸せやったよ。』

『いいよ。別に…』

大は照れ隠しに下を向いた。さすがに里香と二人きりで夜自分の家にいることは初めてだった。いつもは大が部屋に上げないのだが、今日は翔がどうしても大の部屋を見たいと言ったので里香も上げない訳にはいかなかったのだ。

今思えば、これも翔の計算だったわけだ。

さすがに大も男だ。これ以上里香を部屋に置いておく訳にはいかなかった。

『里香…もうおせえから帰れ。送ってやるからよ。』

『うん．．．』

里香とかつてこれ程気まづくなったことはあっただろうか。大は不思議に思った。ただ一回抱き締めるだけでこんなにも里香を女として見てしまうとは…。

里香は高校に入って女子寮に入っていた。大はそこまで送っていくことにした。門限は9時だ。

寮付近の公園に着くと8時40分になった。

『大？ちょっと公園よらん？』

『ああ。』

二人はここまで来るまでも一言も口をきかなかった。

里香は公園のベンチに腰掛けた。大も横に座った。

里香は少し悲しそうな顔をしていた。美しい髪から見える横顔を見ながら大はなぜ悲しんでいるのかできの悪い頭で考えた。

『大…うち大にとって邪魔かな？』

『はあ？』

大は里香の口からこんなネガティブな言葉を聞くのは初めてだった。

『うちなあ、大に付き合ってるわけやないって何回も言われるうちに本当に大がうちのことウザイと想ってるんじゃないかって考えてん。

悲しくなるんや…。」

『…』

大は黙って里香の話を聞いていたが、すぐに里香の言ったことは間違いだと想った。

『ああ。俺おまえのこと本気でウザイと想ってる。』

『…!!!!』

里香は手で顔を隠しながらベンチから立上がり寮に帰ろうとした。瞳からは既に大量の涙が溜まっていた。

大も立上がり里香の手首を掴んで自分の方を向かせた。大と里香の

視線が交わった。

大はゆっくり里香を抱き締めた。

『そうやってすぐ泣くとか、いつも調子乗ってるととか、正義感強すぎて昨日みたいに男に向かって注意して痛いめに合うとかウザイ。』

大は抱き締めたまま言う。そして更に大の抱きしめる腕に力が入った。

『それに…俺がこんなに里香を大事に想ってるのに本気でウザイと想われてるとか言うところがマジでウザいな…。』

大は里香の髪を撫でながら言った。里香の涙も嬉し涙に変わっていた。

『大／／』

里香はまだ泣き声混じりな声で大の胸に顔を埋めた。翔の前できっぱり付き合っていないと大に言われたのがそうとうこたえていたらしい。

『でも…大はうちを女としては見てくれへんのやろ?』

里香は涙で化粧がおちかけている顔を上げて大に言った。

『なんでそんなこと言っただよ?』

大は呆れたように里香に言った。

『だって…高校生が自分の部屋に女がいて早く帰れなんて言わんやろ?』

里香は少しふざけたように言った。

『馬鹿。俺はそんな軽い男じゃねえの。』

大も微笑みながら言った。大がこんなにも優しい笑顔を見せたのは何年ぶりだろうか。

大は公園の時計を見てあと3分で9時になるのを見て里香を離れた。

『もう9時だ。寮に帰れ。』

『はいはい！！！！じゃあ大……ばいばい……』

里香は大に小さく手を振り寮に帰って行った。その手を振る姿はとても幸せそうだった。大は里香が寮に入るまで見送った。

その頃里香の部屋で一緒に住んでいる奈美と早苗は窓から大と里香の様子を見ていた。

『里香めっちゃ幸せそう！！ずっと気にしてたもんね…鷹邸くんが自分を女に見てくれてないって。』

『だけどうらやましいな…。鷹邸くんみたいにクールな彼氏がいて…。顔かっこいいスタイルも言うことないし…。』

『あんたが惚れたらいけないでしょうが…!!』

『そういう奈美もこの前鷹邸くんかっこいいって言ってたじゃん！
!!』

『ただいまー！！！！』

里香が弾んだ声で部屋に入ってきた。

奈美と早苗はギロツと里香を睨んだ。

『ちよっ．．ちよつと！！！！？何よ？』

『幸せものー！！！！』

奈美が嫌みっぽく言った。

『まさか見てたの?』

奈美と早苗は二人そろって頷いた。

『鷹邸くんてやるときはやる男なんだね／＼／まさか里香を抱き締めるなんて想わなかった!!!』

奈美がきやあきやあ言いながら里香をはやし立てた。

『まあうちも今すごく幸せや…大のこと好き過ぎる自分が怖いくらいや…』

里香は少し頬を赤く染めて窓の外を見ながらボソツと呟いた。

早苗も奈美もそんな里香を見て幸せな気持ちになると共に自分達も幸せになりたいという願望が生まれた。

実は早苗は密かに恋をしていた。相手は先程まで里香と大と一緒にいた人。そう、棗翔だった。

だが見るからにヤンキーという感じの翔に話しかける勇氣なんてなかった。

それに早苗は自分に自信が無かった。里香のように美しい容姿は持っていない。今まで付き合った経験も無かった。

『そういえば、二人はいい男おらへんの？』

里香がジュースをゴクゴクと飲みながら問い掛けた。

『あたしはいない。鷹邸君みたいにかっこいい人なかなかいないって…羨ましい…。早苗は?』

『えっ…。いや…いないよ…』

早苗の表情を見て里香はフツと笑い早苗の横に寄って来た。

『その顔は恋してるやろ?』

『いないって…。／／／』

『そうか…? まあ気が向いたら教えてなあ!!!』

3人はいつものように川の字になって眠った。

左に寝ている奈美は彼氏がほしいなあと思いながらクラスの男子の顔を一人ずつ思い浮かべながら品定めし、真ん中に寝ている里香は大のことを想い興奮して眠れず、右に寝ている早苗は翔の顔を思い

浮かべていた。

それぞれ目は閉じているが眠れない夜になった。

第四章【遠足】

高校1年の1学期がもうすぐ終わる頃、東高恒例の遠足が計画された。遠足と言ってもキャンプのような物で、山に入り自分達で魚などを取って食べるというなんとも生徒任せな行事だった。

一泊とはいえ、そうとう体力を消耗するらしい。毎年ぐったりして帰って来るらしい。

行きのバスの中翔と大はクラスを無視して隣り同士で座った。

『なあ大…？俺たちこんなことしてる場合じゃなくねえか？』

『確かにな。俺欠点4教科もあんだけど…翔は？』

『よっしゃあ！！！！俺3教科！！！！』

大と翔ははあっとテンションを下げた。

そんなこんなしている間に目的地に着いた。バスは1年生一同を険しい山の前に降ろすすぐに去って行った。

『皆さん。今からグループごとにテントをはってもらって夕ご飯を調達してもらいます。危険ですので無理はしないように…』

さえない顔をしている中年の男性教師が注意事項を述べていた。

教師の話しが終わり、それぞれ仲良し同士でテントをたてはじめた。だが今時の高校生はテントもろくに立てられないらしい。

『大？おまえテント立てれる？』

『おまえ立てらんないの？』

大はテントを器用に立て始めた。キャンプなんて行ったことは無かったが、ものを組み立てたりするのは幼少期から野生で遊んでいる大には難しくは無かった。

『さすが大だなあ！！また見直したわ！！』

『てめえ大袈裟だよ．．』

翔は目を輝かせて尊敬のまなざしで大を見た。大は苦笑いをした。

『さて！！夕飯でも探してくるか！！大がついてりやなんか調達できんだろ！！』

『翔は本当に人任せだなあ……』

翔は気にする素振りも見せず大に釣竿を渡し川へと歩き出した。

大は昔やったように慣れた手つきで釣りを始め、間もなく2匹魚を釣った。

『大さあ……里香ちゃんのことどうするの？』

『どうするって何が？』

翔のいきなりの質問に大は驚いた表情を見せて翔を見た。

『まだ言っていないんだろ？付き合っ下さいとは．．．』

『なんで俺から言わなきゃいけないんだよ．．．』

翔はふうつと溜め息をついて釣れた魚を持ちテントに歩きながら続けた。

『大は何も分かってねえな。』

『何がだよ？』

『おまえは里香ちゃんが好きだ。すごく大事だと想ってる。おまえはそれでイイと想ってるかもしれないけど．．．里香ちゃんは違ふと想うぜ．．．』

大は釣ってきた魚を焼きながら翔を見た。そしてこの男が言ってることに何一つ間違いがないことに気付いた。

『翔．．．じゃあ俺どうすればいいんだよ？』

大は力無く呟いた。里香を大事に想うがそんな事は口に出せないのが大の性格だ。

『告白するべきだ。』

『いつだよ？』

辺りはすっかり暗くなり、魚を焼くためにたいた焚き火の明かりが二人の顔を照らす。

『それは大のタイミングの問題だな。』

翔はいい具合に焼き上がった魚にかぶりついた。

『うん！！川魚ってなかなか上手いな！！』

『だろ？』

二人は互いの顔を見て微妙みながら魚を頬張った。

だいぶ時間が立ち辺りは漆黒の闇に包まれた。

翔と大はテントの中に入ると懐中電灯を付けて横になった。

『翔こそ、遙さんのことこれからどうする気なんだよ？』

『どうすればいいのかなあ．．』

『偉そうなこと言つくせに自分も迷ってるんだな．．』

『まあな。恋愛ってそんなもんじゃねえのかなあ．．』

大にしてみれば、恋愛の話することなんて初めてだった。改めて翔が自分にとって無二の親友だということを実感した。

午前1時を過ぎた頃だろうか．．生徒全員が寝静まった頃、事件は起きた。

ガシャッ
グシャ

『キャー――！――！――！――！』

熟睡していた翔と大も大きな物音に目を覚ました。

『熊だあゝ！！！！！！逃げろ！！！！』

同じクラスの男子生徒が叫びながら慌てて走り去って行った。

『大！！！！？聞いたか！！？熊だつて！！！！やばいだろ！！！！』

『ああ。つたく．．熊もいい迷惑だなあ．．．』

翔と大はテントから抜けると辺りを見渡した。100メートル先に熊がいた。テントの中の食べ物を狙っているのだろう。

大の視力は人並みはずれている。熊が明らかに誰かに襲いかかろうとしていた。

同じクラスの京子という女子生徒だ。

担任教師も腰を抜かして助けに行こうとはなしない。

大はみんなとは逆に熊の方へ走って行った。

『おい！！！大！！何やってんだよ！！』

『翔！！先に逃げとけ！！』

翔も京子の姿を確認して大が助けに行こうとしているのに気付いた。

その頃里香と早苗と奈美も熊から離れた場所に非難していた。

『里香！！あれ京子じゃない？？』

『本当だ！！やばいよ．．』

京子に熊は一步一步近付いて行つた。京子は腰を抜かして涙を流しながら熊を見ている。

『里香！！誰か熊に近付いて．．！！！！あれ鷹邸くんだよ！！』

『えっ！！！！？？？』

里香は慌てて熊に近付いていく生徒を目で追つた。間違いなく大だった。

『あかん．．大が死んでまう．．』

里香は自分も大を止めに行こうと走りだした。しかし、奈美と早苗がそれを阻止した。

『里香！！落ち着いて！！』

『危ないから辞めて！！』

『大が・・・／＼離して・・・大！！大・・・／＼／』

大はやつと熊の近くまで行くと、京子と熊の間に立ちはだかった。

熊はいきなり来た大に興奮したのか、襲いかかろうとした。

大は熊の振り下ろされてくる腕を両手で掴みなんとか攻撃を逃れた。

『ったく・・・さすがに熊は強いな・・・』

大は再び襲ってくる熊に右腕を噛ませ、その瞬間にあらかじめ持っていた竹で熊の股間を思いっきり一突きした。

キャフンッ・・・

熊は大の一突きのせいで完璧に死んだ。大の竹は見事に急所に刺さっていた。

大は右腕を犠牲にして熊を倒したのだ。

『はあ・・・疲れた・・・』

大は京子に何も言わずそのまま翔の元に帰った。周りにいた生徒はみんな大の事を見ていたが、大は気にすることもなく歩いていった。

右腕からは大量の血が吹き出していた。

翔は大の方に駆け寄った。

『おまえ、馬鹿か！！ 一步間違えれば死ぬところぞ？？』

里香と早苗と奈美も駆け寄って来た。

翔は自分の着ていたＴシャツを脱ぐと破って大の傷に縛った。

『そつや！！ 大の馬鹿！！』

里香は泣きながら大に怒鳴った。早苗と奈美は何も言わずに見守った。

大は翔と里香を見ながらフンツと笑った。

『でもよ．．俺が行かなかったらあの子は死んでたよ。あの熊の雰囲気からして間違いなく殺る気だった。』

大の言葉に里香も翔も黙り込んだ。

『心配してくれてありがとな。』

大は翔と里香を見て微笑んだ。傷口からはまだ血が出ていて、翔が縛った白いＴシャツはみるみる赤く染まっていた。

『ほら．．いくぞ！！先生に見せた方が良いだろ。』

『いいよ．．このくらい別に．．』

大はいつも通り気怠い顔をして言った。しかし、里香も大の背中を押して無理やり連れて行った。

救護の先生は牧野佳奈だった。牧野は生徒から慕われて男のようにサパサパした性格だった。

『先生！！大が熊に噛まれたんだ！！診てやって。』

翔と里香は大を引っ張って牧野のいるテントに入った。

『あら．．鷹邸くん、初めまして。』

牧野は30歳で相変わらず綺麗な顔で座っていた。

『佳奈ちゃん・今日も綺麗だなあ!!』

翔は牧野を見ながら鼻の下をのばした。牧野はピンクのルージュにベージュのファンデーションに黒ぶち眼鏡で茶色い髪は胸の下まで伸びていてストレートだった。妖艶さは半端じゃない。男子生徒の憧れの的だった。

翔とは対照的に大は牧野の顔も見ずに気怠そうに座る。

『先生・俺別に大丈夫だから病院とかいいですよ。適当に包帯でも巻いてください。』

牧野は大の腕を見て驚いた。くつきりと熊の歯形に皮膚が破れていて血が大量に流れ出している。

『ちよつと！！！？鷹邸くん！！？これ半端じゃないわよ！！！！』

牧野は白衣を脱ぐと気合いを入れて布で腕を縛り血を止めた。

『鷹邸くん？？病院に行くわよ！！』

『大丈夫だつて．．！！！！』

『駄目。力ずくでも連れて行きます！！まったく．．』

牧野は大を無理やりテントから引つ張り出すと自分の車に乗せて病院に向かった。

里香と翔は心配そうに大を見送った。

車から見える景色は漆黒の山道だった。少しの明かりも無い。大は牧野の横の助手席に座ったまま無言で前を見ていた。

『痛いはずよ？そんな深い傷を負ってわめかない子見たの初めてよ。』

牧野は長い前髪をかきあげながら大に言った。

『身体の痛みなんてコントロールできるだろ・・・』

『できないよ。普通の人間にはね。まず熊を目の当たりにして人を助けようなんて思考にならない。』

『何が言いたい？』

大は運転している牧野の横顔を見て問い掛けた。牧野は表情を変えずに言った。

『あんだ・育ちは？』

大は牧野から目を離すと窓の外を眺めた。

『育ちはただ親父とは一緒に住んでなかったし、母親は早くに死んだ。それからは叔母と暮らしてる。今は一人暮らしだ。』

牧野は大の寂しい横顔をチラッと見ると何かを悟ったのかそれ以上は何も聞かなかった。

牧野と大の乗った車は間もなく病院に辿り着いた。

医者も目を丸くして大の傷口を見た。

『熊に噛まれたのか…もう長く医者をしてるがこんな傷口見るのは初めてだ。』

白髪頭の50歳くらいの医者は大の傷口を消毒して、局部麻酔をして傷口を縫った。

治療が終わると牧野が心配そうに大に近付いて来た。

『お医者さんなんだって？もう大丈夫なの？』

『縫ってもらったから大丈夫だよ。』

『そう…』

牧野はほっとした表情になり再び大を車に乗せた。

『今日はもう家に帰りなさい。送っていつてあげるから。』

牧野は再び運転をし始めた。

牧野の運転する腕に火傷のような跡があることに大は気付いた。普段の大なら決して興味を持たないがなぜか気になって仕方なかった。

結局車内は静かなまま大の家の近くまで来た。

『この辺?..』

『ああ。ここでいい。歩いて帰るから...』

大はそう言って車を降りた。

『夜も遅いんだし、気をつけて帰りなさいよ?..』

『はいよ。』

『おやすみ。』

牧野の声を背に受けながら大は歩き慣れた道を帰って行った。

ドカッ

無事に発車するはずだった牧野の車の方から物凄い音が聞こえた。大は驚いて後ろを振り替えると明らかに怪しい男達が牧野の車を取り囲んで牧野を外に引きずりだそうとしている。

なに・・・!!!!？

大は慌てて来た道を走り牧野の車に行った。すでに牧野は車から降りられていた。

『おい…何やってる？』

大が低い声で牧野を捕まえている男達に問い掛けた。3人の男がいた。みんな黒いスーツを着ていた。

『鷹邸君…逃げなさい！！！！』

牧野が必死に訴えかけるが大は動こうとしない。1人の男が口を開いた。

『俺はこの女の亭主だぞ？おまえみたいなガキにつべこべ言われる

筋合いはないねえ。』

大は更に鋭い目になりその亭主を見た。

『亭主なのにこんなに無理やり車から引き降ろすとはな……。』

残りの2人の男がパキパキと指をならしながら大に近付いてくる。

『兄さんよ…先生を助けてかつこつける気かい？つべこべ言わないで去れ。身のためだぞ？』

もう1人も頷く。

『てめえ名前なんて言うんだ？』

大がいきなり亭主らしき男に問い掛けた。

『金丸だ。自己紹介したところで君と会うことはもうなくなると思
うけど…?』

大はフンツと鼻で笑った。

『俺は今から半殺しにする相手には絶対名前を聞くようにしてんだ
よ…』

『なんだとてめえ…』

3人の男達は一斉に大に襲いかかろうとした。大はアドレナリンが
出ているせいか熊に噛まれた傷の痛みを忘れて構えた。

『ちょうど喧嘩に飢えてたしなあ…』

5分後3人の男は地面に寝ていた。

『鷹邸君…』

大はなんと無傷だった。今し方闘いを終えてむしろ快感さえおぼえていた。

『先生…あんたが気をつけて帰れよな。』

『ごめん…』

牧野は体を震わせながらまだ立ち尽くしていた。形の良い細い足には擦り傷があった。男達ともめた時についたのだろう。

『あんたさっきの誰だ？本当にあんたの旦那なのか？』

大はまだ震えている牧野に問い掛ける。牧野は下を向いたまま話した。

『昔の旦那』

『つつことはあんた…』

金丸は絶対裏の人間だ。大はそのことを闘って気付いた。雰囲気に分かるのだ。

大の表情を見た牧野は自分のブラウスのボタンを開けて左胸元を見せた。

そこにはさそりの刺青があった。本格的に入れられたその刺青に美しささえ覚える。

牧野は悲しげな顔で大を見た。大もその視線に気付いた。

『いいよ。もう。』

大は牧野の服を元に戻した。

『送って行くよ。』

『…ありがとう』

大は牧野の車に乗ると牧野の家までついて行った。

『車に乗ってるのに送ってもらうなんて悪いわね。』

『車に乗っててもさっきみたいに襲われることもあるから別にいい。』

牧野は運転しながらありがとと小さく言った。しかし明らかに顔はおびえているようだった。

牧野の部屋はいたってシンプルだった。教師にしてはいいマンションに住んでいる方が…。

『じゃあ…俺帰るから。ちゃんと鍵して寝ろよ?』

大は牧野を玄関口まで送るとすぐに帰ろうとした。

『待つて・・・//』

『ん?』

いきなり牧野が大の腕を握って振り返らせる。その手は驚く程震えていた。今の牧野はいつも学校でみせる冷静沈着な“牧野先生”ではなかった。

『…なんだよ?』

『今日くらい…一緒にいてくれない?』

不安げな牧野の顔を見て大も断るに断れなかった。無理もない…ほんの数十分前に襲われたのだから。

大は女と話すことが基本的に苦手だった。それが夜に女と2人で同じ部屋にいるとは自分でもびっくりした。

牧野は化粧を落としてベッドに横たわった。もちろん1人暮らしなのでベッドは1つしかない。

『一緒に寝よつか?』

牧野がふざけて大に言う。笑顔を作れるようになった牧野を見て大は少し安心した。

『いいから早く寝ろよ…』

結局大は牧野の寝ている部屋で一晩中起きていた。ひどく疲れているはずなのに不思議と睡魔がやってこなかった。

牧野の寝顔を見ると自分の母親を思い出した。何も親孝行出来なかったのが悔しかった。

続く

1章～4章（後書き）

危険な太陽を読んでくださって誠にありがとうございます。続編が完成しましたら、また是非お読み下さい。

5章

第五章【頭】

『おまえが鷹邸大か…確かに調子にのったような面してんなあ…』

『…』

入学して一学期も終わってないというのに大は3年生から屋上に呼び出しをくらった。

大が屋上に着くと鬼多高校の頭の谷山とその連れの西野と工藤が立っていた。

つたく…
めんどくせえ…

『鷹邸！てめえ三凶を倒したからって調子にのってるんじゃないぞ！谷山君に勝ってから偉そうな顔しな…！！』

…別に偉そうな顔してねえだろ…

大はだるそうな顔をしながら三人を見た。谷山はオールバックに口ピアスを付けて太い首をボキボキ鳴らしている。

『で？なんで俺呼び出されたんだ？』

大は長身の谷山を見上げ睨みながら聞いた。

『馬鹿か…てめえがあんまり調子にのってるからボコボコに…っ！
！！？っ！！！！／／／』

谷山が言い終わる前に大は谷山の顔面に右ストレートを見舞った。

谷山は無様に一発でノックアウトされた。

『てめえ…谷山君になにしてんだあ！！』

西野が大にハイキックを入れようとすると大はその足を握り妖笑すると足首を握り背負い投げのように西野を床に叩きつけた。

工藤はバットを握り大に襲いかかってきたが大の前蹴りが溝にヒットしあっけなく倒れた。

…弱すぎてつまんねえな…

大は屋上から立ち去り教室に戻った。昼休みでそれぞれ昼食をとっていた。

穏やかなクラスメイト達も大が入ってくると一瞬シーンとなる。熊に勝った人間なんて不気味だ。

大はそんなアウェイな空気にもすっかり慣れていてベランダに出るとタバコを吸い出した。

そんな大だが…
女子には密かに人気があった。

クラスの女子達がタバコを吸っている大を教室から見ながらコソコソと話している。

『見て！！鷹邸君！！タバコ吸ってるゝ　かつこいい／／／』

『三年の先輩に聞いたけどさっき鷹邸君谷山先輩に呼び出されて逆に先輩をボコボコにしちゃったらしいよゝ／／しかも！3対1だよ！！』

『めっちゃ強いじゃん／／さすが熊に買った男』

噂は噂を呼び女子の中ではクールで強い男鷹邸大は定着していった。その人気は学年を越え2、3年生にまで及んだ。

そんな噂を聞きながら顔を赤く染めて大を見つめる女子がいた。

京子だ。

大に熊から助けってもらって以来京子の中では大がヒーローのような物だった。

タバコを吸い終えて教室に入ると翔が教室に入ってきた。

『大！大丈夫だったか？谷山に呼び出されたんだろ？』

翔は違うクラスだというのにでかい声で大に駆け寄ってきた。

『…大丈夫だ・何そんな心配してんだ？』

『だっておまえ谷山つつたら鬼多高の頭だぜ？』

『… あいつがか？』

大は少しがっかりした。大好きな喧嘩が同等にできそうな男がこの学校にはいないということだ。

『さすが大だな！！！無傷とは…』

翔は大をくまなくみながら言った。

『ん？…待てよ…てこたあ 今日から鬼多高の頭って大じゃねえか？』

『…は？』

翔は興奮気味に言った。

言っていることは間違っていないかった。

この日から大は一年生にして鬼多高の頭になった。

その日も大はアルバイトに出向いた。商品が入っている段ボールを運ぶのにも慣れてきた。

高い時給だけあって重いものばかり運ばされるが大にはなんてことのない作業だった。

そんな大を密かに京子が見ていた。京子は大がアルバイトに出る時間帯は決まってこの大型スーパーにやってきて気づかれないように大を観察していた。

京子は大のストーカーのようになってしまっていた。

内気な京子は友達も少なく大に話しかける勇氣も無いため、このよ
うな手段で大を知ろうとしたのだ。

鷹邸君：

今日もかっこいいな…／／／

大はそんなこととは知らずに夜まで精一杯働いた。

翔は頻繁に大のアパートに遊びに来るようになった。
必ずと言っていい程自分の家の晩飯を持つてくる。
貧しい大に密かに力を貸したいと思っているからだ。その日は肉じ
やがを持ってきてくれた。

『毎回わりいな…』

『いいんだよ 男の一人暮らしなんだ…ろくなもん食べてねえだろ？里香ちゃんも部活に入っちゃったしな…寂しいだろ？』

『ばっ／＼馬鹿言っな…／＼忙しくなってせいせいしてんだよ…』

『ハハハ…照れんな照れんな!!』

翔はニイっとからかうように笑った。里香はバスケット部に入部した。早苗と奈美も一緒だ。

大は翔にからかわれ少し顔を赤らめながら肉じゃがを食べた。翔はタバコを吸いながら微笑み大を見た。

二人の友情は時が経つのに比例して深まって言った。

次の日：
事件は起きた。

大が昼過ぎに学校に行くと机の上に翔の携帯が置いてあった。

なんだ：
翔の携帯がじゃねえか：

大が何気なく携帯を開いて見ると殴られてアザだらけの翔が写っていた。

…！！！！？

大は焦り写メを何度も見た。腫れていて分かりにくいが明らかに翔の顔だ。

翔の携帯のバイブが鳴った。
どうやらメールが届いたようだ。

「鷹邸、今夜9時に白岩橋の下に来い」

大は拳を机に叩きつけた。

…だれがこんなことを…

…ゆるさねえ！……！！……！！

5章（後書き）

ご購入ありがとうございます！次話もよろしく願いします

6章

第六章【新しい頭】

白岩橋に大が着くと見知らぬ制服を着た明らかに不良ですといった男子高校生が待ち構えていた。

『翔を迎えに来た。返せ。』

『まあまあ…おまえが鷹邸君か？なんだ随分色男じゃないか…』

不良高校生の一人が言いながら大に近づいてきた。

『うつせーよ。早く翔返せ。』

不良高校生の中の一人が大に近付いていく男を止めて言った。

『おい…あんまり失礼な事を言つなよ。1年坊だが一応鬼多高の頭なんだからよ。』

『つか、てめえら誰だ？勝手に翔を連れ出して…何が目的だ？』

大の問いかけに中心格らしき男が立ち上がった。

『俺は高橋 タカハシコウタ 幸太。弑死高の頭だ。こいつらはうちの学校の俺の派閥のトップ10人だ。』

日本の四大悪高校は、大達が通う鬼多高、弑死高、檜餓死高、未菜未高の四つだった。

この四つの高校には喧嘩でトップになりたくて入学する生徒も少ない。

四大悪高の頭を取ることはいわゆる不良の憧れの的だ。

だが四つの高校を制覇した人間は歴史上いない。高橋は鬼多高の頭が1年に変わったと聞いて鬼多高を制覇するには今しかないと思っ
たらしい。

『なんで翔をボコボコにした？』

弑死高の一人の男がボコボコにされた翔を持ち上げて大に見せた。

『…翔…!!』

『だってあんたこうでもしないとここにこないだろ？』

大が翔に駆け寄ると一人の男が大に向かって右ストレートを打つてきた。

大は交わしたが内心少し驚いた。

こいつら…
結構やるな。 まあ…相手にはならないか…。

大は右ストレートを交わし下に体を流し相手の溝に右フックを見舞った。

『グハッ／＼／』

男はあっけなく倒れた。 大の驚異的なスピードに他の弐死高の生徒も驚きを隠しきれなかった。

『なるほど…喧嘩の場数が違うって訳か。 鷹邸には俺ら全員でかかっても勝てねえな。』

『高橋さん！何を言っんだ！』

『だからこうする』

高橋は翔を一発殴った。

『何すんだてめえ……』

大は高橋を睨みながら言った。

『これからはおまえがうちの生徒を一発殴ることに素を一発殴る事にする。』

『動けねえ奴を殴るなんててめえらクソだな……』

大は仕方なく手を後ろに回した。

『気が済むまで殴れ。その代わり翔には指一本触れんな。』

『頭も良くなければ頭にはなれないんだぜ?』

南はハッハッハと笑いながら大を殴り始めた。

何発殴られようが大の顔の表情は変わらなかった。

大は鼻血と瞼の傷から出る血で顔はぐちゃぐちゃになった。それでも倒れずにしっかり南を見据えていた。

高橋は恐怖を感じた。眼差しがぶれない大の顔は恐ろしく怖かった。何発殴ろうが息一つ乱れてない。

『まちかよ...』

『高橋さんの拳をあんなに受けて立ってられるのかよ!...!』

見ていた弑死高の生徒達は大の驚異的な体に驚きを隠しきれなかった。

『おえ／＼！！』

『っんぐ／＼／』

いきなり弑死高の不良達が襲われた。高橋が後ろを振り向くと弑死高の生徒は既にみんなのびていた。

一人の男が立っていた。

『誰が弑死高の頭だつて？高橋先輩？』

いきなり現れたその男は品の良い茶髪に白い肌：一見喧嘩とは無関係な顔立ちだった。

『…久しぶりだね…先輩　なんで呼び出しても来てくれないの?』

『…神谷…!!!!』

高橋の顔が少し恐怖に歪んだ。

『高橋先輩…勝負しましょうよ? 弑死高の頭かけて…』

『…!!!!』

高橋は後退りしながら冷や汗をかいていた。大も神谷を見ただけで
雰囲気強いということが分かった。

『おまえとマンツーマンで勝てる気がしねえ…!!!! ソック!!!!』

高橋が言う前に神谷は高橋の顔面にパンチを見舞った。

『おまえじゃないだろ？あんたみたいな汚ねえ奴が頭なんて認めないから。』

高橋は鼻血を大量に出して小さく震えながら分かったという風に必死に頷いてた。

神谷はニッコリ笑うと翔を起こして大の前に運んで来た。

『君すごいね。あんなに殴られても全然平気そうじゃん。つかあんだ強いね...』

大は翔を受け取った。

『...おまえこそ...相当強いな。』

大と神谷は目線を合わせてフンと笑いあった。

『助けたつもりはないだろうが…ありがとな。』

『いいよ。俺は神谷千秋。カミヤチアキ名前聞いてもいい？』

『…鷹邸大。』

『その顔の傷が治ったらタイマンはってよ？』

『なんでだ？』

『なんでって…鷹邸君、喧嘩好きでしょ？そういう人とやりたい。それに鷹邸君強いし。』

神谷はそついうと手を振りながら帰っていった。

月の光になびく神谷の髪が輝いた。

大は翔を抱えると家路についた。

弑死高、鬼多高それぞれ史上最強の頭が誕生した。

6章（後書き）

！ 次章も読んでいただけるとありがたいです。 宜しく願います！

7章

第七章【千秋】

『安西さん…可愛いよな…』

『あの細い手足…綺麗な髪…／＼天使だな…』

バスケット部に入った里香は早速男子バスケ部にモテていた。同級生はもちろん先輩からも大人気だった。それに加え里香は意外に運動も出来た。幼い頃から大を追いかけて回っていた成果か。

『もうダメ…足クタクタ…』

部活が終わった里香は大の部屋の玄関の前に来ていた。夜遅くまで働いてきた大は玄関で里香が待ち伏せしているとは知らず帰ってきた。

『おかえり 大 』

『おまえ何してんの？』

『明日から三連休だし…来ちゃった／＼邪魔かな？』

『邪魔じゃねえけど、もう１１時だぞ？寮母カンカンだろ？』

大は里香が久しぶりに会いに来てくれて嬉しい気持ちを強引に抑えながら言った。

『寮には外泊届け出しているから大丈夫…／＼』

『…そうかよ／＼』

大は部屋の鍵を開けると里香を部屋に入れた。外泊という言葉に大の心臓は少しドキドキしていた。

大の部屋は相変わらず何もなく里香は畳の上に置いてあった座布団に座った。短いスカートに照れてしまい大は目線を背けて少し赤くなった。

『なんか食うか？』

『大のことやから何もないんやろ？』

里香が言いながら冷蔵庫を開けるとミネラルウォーター以外、本当に何もなかった。

『本当に何もないんや』

あきれる里香に大は当たり前だと言いながらポストに入っていたチラシを出した。

『なんか食いにいこうぜ？おまえ何がいい？』

大の質問に里香は慌てて首を横に振りながら言った。

『そんな贅沢せんでええ…大毎日バイトで頑張ってるんやから…！
！…！』

里香は心配そうに言ったが大は笑いながら24時間開いてる飲食店のチラシをテーブルの上に広げた。

『いいんだよ。おまえは人の心配しなくて。』

『でもさ…』

『よし！この鰻重食いに行くか？24時間空いてるしな』

『分かった　大と外食なんて初めてやな　／／』

里香は開き直るかのようにぱあっと明るくなり嬉しそうに言った。
大は里香が久しぶりに会いに来てくれた嬉しさから何か里香に食べさせてやりたくて仕方なかった。

店に着くと大と里香は向かい合わせに座った。小さい店だったが落ち着く雰囲気のお店だった。

注文をとりに来た店員に大は鰻重二人前と頼んだ。

里香は持ってこられたお茶を飲みながら大を眺めた。

『大は最近アルバイト上手くいつてるん？』

『まあな…おまえは部活楽しいか？』

『うん／＼バスケットって本当に面白いんよ　はまってしまっわ』

『そうか…良かったな…』

大は少し微笑みながら楽しそうに話す里香を見た。

少し痩せたか？

本当は心配で心配で仕方ないんだぜ？おまえのこと…

怪我だけはするなよ？

無理するなよ？

言いたいことはたくさんあるのに言葉に出来ない…

鰻重が二つ来て里香はいただきますと手を合わせて食べ始めた。

『ん めっちゃ旨いじゃん』

大も何も言わずに食べ始めた。鰻重の味より里香が喜んでる顔の方が大の中では大きかった。

『なあ？大？』

『ん？』

いきなり里香は少し不安そうな顔になったので大は不思議そうな顔をした。

『京子が大のストーカーしてるって噂本当なん？』

『京子って誰だよ？』

『熊に襲われかけた子や!!』

『あゝあの静かな子か？』

大はやっとのことで京子の顔を思い出した。

『女がストーカーとかするわけねえだろ？』

『何もされてないんやな？』

『当たり前だ。』

『ならええんや』

里香は安心したように笑った。

店を出て再び二人は大の部屋へと戻ってきた。既に深夜1時になるうとしていた。

『大？シャワー借りていい？』

『ああ…』

『大もまだシャワー浴びてないんやろ？一緒にあびよっか？』

『ばっ／＼ばかか…早く先に浴びてこい…!!』

大は赤くなりながら言った。そんな大の表情を見て里香はおかしそうに笑いながらシャワーを浴びに行った。

大はシャワーを浴びようと下着を取ろうとタンスを開けた。しかし今日着るはずだったボクサーパンツがどうしてもない。

あれ？

前も黒いパンツなくなっただんだよな…

その時大の頭に京子の顔が浮かんだ。

…まさかな。

そんな下着なんか盗むわけねえよな…

大はテレビをつけてニュースを見始めた。

“世界的に有名なホテルグループ、ホテルCHIAKIの会長、^カ神谷正憲氏の長男千秋さんが公立高校に入学していることが分かりました。”

！！！！？

神谷…千秋…？

あいつか…！！！！？

大が驚いてテレビの画面を見ていると報道陣に囲まれている神谷千秋が写し出された。

“千秋さん！あの弑死高校に通っているのは本当ですか？”

“お父様はなんに行っているんですか？”

“弑死高は柄が悪いことで有名ですが…”

千秋はうざったそうに報道陣をふりきりながら歩いている。

大が映像に食いついて見ていると里香がシャワーから上がってきた。

『大何見とるん？あつ！！神谷千秋やん。』

『なに？おまえ知ってんの？』

『はあ？日本全国で今めっちゃ有名やで。ホテルCHIAKIの息子である美形。マスコミがほおってないわ。』

『へえ』

『日本中のセレブが婚約を申し込んでるわ。もちろん一般人にも人氣や。』

『へえ！あいつそんなにすげえ奴だったんだ。』

『なんや……？あいつって？』

『俺この前こいつに会ったんだ。神谷千秋に。』

『え〜!!!?』

里香は大の発言が信じられないと言った感じに驚き大の隣に座りながら髪を拭いた。

『なんで大が神谷千秋に会えるん!?!』

『いや…この前翔を助けに行ったらたまたま神谷が来たんだよ。弐死高の頭が来てたんだが…あいつがそいつをボコボコにしてさ…まあ助かった。』

『…じゃあ神谷千秋は今弐死高の頭なん?』

『ああ。そうなるな…』

『ちゅうか…大!!!また喧嘩したん?大丈夫やった?』

里香はいきなり心配そうに大の顔を眺めた。まだ少し傷が残っていた。

『怪我しとるやん！！でも大が怪我するなんて相手そんなに強かったん？』

『雑魚ばっかだった。人質とられてんだ。仕方ねえだろ。』

『そうか。本当卑怯やな。忒死高…』

『でも…その神谷って奴は強いぜ！！』

大はワクワクしたような顔をして里香に言った。大が誰かを強いというのはなかなか無いことだった。

里香は大のワクワクする顔を見てにつこり笑った。やっぱり大の少年のような顔が一番素敵だった。

『じゃあ俺シャワー行ってくるわ。』

『分かった』

大は浴室に行った。里香は携帯で寮で同じ部屋の早苗にメールを送ることにした。

「大の部屋でお泊まりしてる まぢ嬉しい（＊・V、）」

メールを打つ里香の顔はほころんでいた。メールを送信するとすぐに早苗から返信が来た。

「よかったね おめでとう（＊V V+）鷹邸君を今日こそものにしなきゃ！！笑」

…早苗のバカ…／＼
ものにできるもんならもうしてるっちゅうに…。

里香が早苗からのメールではにかんでいると大がシャワーを済ませ
部屋に戻ってきた。

大は髪をタオルでゴシゴシと拭きながら里香の横に座った。
大の髪からはシャンプーの良い香りがした。

『大？もう遅いし寝よか？』

『そうだな…』

大の心は少し焦っていた。
里香を自分の部屋に寝かすだけでも硬派な大は戸惑っていた。自分
に里香に手を出さない理性があるのは分かる。

だがいくら幼馴染みとはいえ高校生の異性二人が同じ部屋で寝るのはお互いやはり緊張するものだ。

シャワーを浴びた為スッピンになった里香の顔を改めて大は見た。いつもの厚化粧より断然に可愛く見えた。

『大…』

大が里香のスッピンをまぢまぢ見ているといきなり里香が抱きついてきた。

『…！！！？／／おいおい・里…香…？』

大が里香の肩を押して離そうとすると里香はますます強く大を抱き締めた。

『離さんで… / /』

『… / /』

大は自分の中での理性がなくなりそうなのを感じた。

7章（後書き）

次章も是非ご購入読よろしくお願いします!!

8章

第八章【衝突】

お互いの心臓の音が聞こえる程里香は大をギュウツと抱き締めていた。

大は必死に自分の理性を保とうとしていた。抱き締め返してしまつたらその次までしてしまうような感覚に襲われた。

しかし大は里香の細い体を抱き締め返した。
そして決意した。このまま中途半端に里香の気持ちをもてあそんではダメだと…。

『里香…？』

『ん？』

『俺は…おまえが好きだ… / /』

『…大 / / /』

大は告白すると共に里香の体をますます強く抱き締めた。里香は
大の告白が未だ信じられずに大の胸板に顔を埋め、喜びから涙を流
した。

『…大ありがとう… / /』

『今更だけど…俺の女になってくれ… / /』

大は照れるのを必死に堪えながらずっと心で思っていたことを口に
した。

『…うちで良ければ喜んで… / / /』

里香は顔を上げると大を見てにっこり微笑んだ。大も里香の目をま

っ
す
ぐ
に
見
返
す
と
微
笑
み
返
し
た。

『何泣いてんだよおまえ?』

『大がいきなり告るからびっくりして泣いてしまったんやん… / /
』

大はなんだそれと小さく言いながら里香の涙を親指で拭いてやった。

里香は顔を赤くしながら嬉しそうに涙を拭かれた。

『もう3時だぜ? 寝るぞ?』

大が時計に目をやりながら言うのと里香は大の手を引っ張ってベッドに座り大も横に無理矢理寝かせた。シングルベッドに二人はキツかった。

『おい！！里香狭いだろうが！！俺置で寝るからいいぜ？』

『いいやん…／＼彼女来てるのに別々に寝る男が何処におんねん！』

里香は大の方に寝返りをうってたくましい腕に絡まりついて目を閉じた。

『…たく／＼仕方ねえな…／＼』

大は里香に毛布をかけてやりながら自分も目を瞑った。

自分の隣に里香が寝ていると思うと何処か緊張した。ついに自分の女になったことを実感した。

里香は大が眠り就くまで寝たふりをすることにした。

大が寝息をたてはじめると目を開けて大の寝顔を覗き込んだ。

大：めっちゃ可愛い寝顔なんやね

里香は大の寝顔に対して微笑んだ。何分、何時間見ても飽きない気がした。

里香は今自分が大の彼女になったことを冷静に考えていた改めて喜びが身に染みた。

ずっと自分の片想いなのではないかと不安になっていたからだ。幼馴染みだから女に見てもらえない気がしていた。

大の寝顔を見ながら改めて大の“俺の女になってくれ”という言葉を出した。胸がキュンとした。

里香は大を起こさないようにそつと大の胸板に顔を埋め抱きつくよ

うな格好で目を閉じ、眠りに就いた。

朝の9時になり大が先に目を覚ました。見ると自分の腕の中に里香が眠っていた。

改めて里香を見て起こさないように髪を一撫でしてベッドから抜け出した。

顔を洗い近くの食品店に行き、買い物を済ませ冷凍してあるご飯を二膳を解凍し卵焼きと味噌汁を作り、ウインナーを焼いた。

二人分の朝御飯を作り終え大は里香を起こしにベッドに向かった。

『おい？里香？起きろ…』

『ん？』

里香は目を擦りながらムクツと体を起こした。

『…大…おはよ』

『おう…飯作ったから食べよ…』

里香は顔を洗い大の作った朝御飯を見て驚きながら座った。

『大が作ったん？』

『おっ…』

『めっちゃ美味しそうやん いただきます』

里香はパアツと明るくなり食べ始めた。

『うん めっちゃ美味しい』

『そうか…？そりゃ良かった…』

二人が朝食を食べ終えて一時するとチャイムが鳴った。

『誰やる？』

『さあな…』

大が扉を開けると翔と見知らぬ男が立っていた。

『よっ 大』

『こんにちわ!!!!』

見知らぬ男は深々大に頭を下げた。

大『...? まあとりあえず上がれよ?』

翔『そうさせてもらっわ』

『失礼します!!!!』

翔と見知らぬ男が部屋に入った。入った瞬間に翔は里香を発見した。

翔『里香ちゃん 久しぶり 』

里香『翔君！！久しぶり 』

翔は今日も可愛いね〜と里香を誉めながら大に近づいて小声で囁いた。

翔『大く部屋に連れ込むとはやることやってんだなあ おまえも羨ましいぜ 』

大『馬鹿／＼からかってんじゃねえぞ？／＼で？用はなんだ？』

大はからかわれるのをシカトしながら翔に言った。

見知らぬ男はまだその場に立って気を付けをしていた。

翔『座れよ?』

翔は見知らぬ男に言い男は失礼しますと言いながら正座した。

翔『実はな…こいつがどうしても大の弟子になりてえみたいなんだよな…』

翔は見知らぬ男を見ながら言った。

大『弟子!!!!?』

大はびっくりして聞き返した。男は大を真っ直ぐに見た。

『初めまして!鷹邸サン!!俺は三浦太一(ミウラ タイチ)と言います!!鬼多高校1年です!!俺を弟子にしてください!!』

三浦太一という少年は必死に大に頭を下げた。突然の事に里香も口

を開けて太一を見た。

大『待てよ…まず俺は弟子をとれるような大層な人間じゃねえし、
なんで同級生なのに俺の弟子になんだよ？』

大はあきれたように頭を下げ続けている太一を見た。

翔『おまえが熊を倒すところとか、三年の派閥を次々に倒すこと
が見ておまえについて行きたくなっただけだぜ？』

大『はあ？』

翔の説明を聞いても大はピンと来なかった。

里香『いいんじゃない？こんなに頼んでるんやから…？』

里香は未だ頭を下げている太一を見ながら言った。

翔『怖いイメージしかないお前に声かけるのは結構勇気いるんだぜ？ たった一人で鬼多の頭になってから学校中で鷹邸大という名は噂されてんだ…熊をも殺す鬼人ってな…』

大は困り果てた顔になってしまった。太一の顔を見れば見るほど本気で言ってるようにしか見えなかった。

大『じゃあよ…弟子とかじゃなくて普通にダチになろうぜ？』

太一は顔を上げて目を輝かせた。

太一『いいんですか！！！？』

大『おう…よろしくな？』

太一『俺には勿体無いお言葉です!!』

太一は満面の笑みを浮かべて太一を見た。

太一『…俺は鷹邸サンみたいに強くなりたいんです…』

太一は照れて頭をかきながら言った。

大『強く?』

太一『俺、中学の時はイジメにあつてて…このままじゃ男として生きていけないと思い、強くなるために四大悪高の一つ鬼多高校に入つたんです!!』

翔『それだけの理由で鬼多高に入るとは逆にいい度胸だな…』

翔が飽きたように太一に言った。

翔『で？今は強くなれたのか？』

太一『いえ…またイジメにあつてて…』

太一は恥ずかしそうに下を向きながら言った。

大『誰にいじめられてんだ？』

太一『三年の中西派に…』

大『中西派？』

派閥に全く興味のない大は首をかしげた。

翔『まったく…大はなんにも知らないんだな…頭とまったくせに…中西派ってのは前の頭だった守谷派と対抗してたNo.2の派閥だ。』

里香『話しによると、気に入らない派閥がいればその頭を集団暴行する最悪な派閥らしいわ…』

大『へえ』

大は興味なさげに聞いた。

太一『毎日金を持っていかないと殴られるし…もっとうしていいか…』

太一は不安そうな表情をのぞかせた。

大『バカ野郎…殴られようがなにされようがやりたくねえことは断るんだよ…』

太一『鷹邸サン…』

大のあまりにも早い返事に太一は瞬きをして大を見た。

大『頑張って自分の意見を中西に言え。それでボコボコにされてど
うしようもなくなったら俺が助けてやる…』

翔『さすが大だな 友達になったからには俺も助けに行くぜ…』

太一『鷹邸サン…翔サン…』

太一は二人の言葉に感動して泣きそうになっていた。

太一は涙を堪えてにつこり笑った。童顔な顔がますます童顔に見え
て大は癒される思いがした。

里香『三人とも意見貰くのはいいけどケガはしないでよ？』

翔『はい』

太一『分かりました／＼』

大『喧嘩に怪我はつきもんだろうが…』

大はまたぶつくさと里香の意見に反発した。翔が素直になれと大の肩を叩きながら言った。

太一は初めて間近で見る里香の美しさに顔を赤く染めていた。

い

いきなり翔の携帯が鳴り始めた。

翔『もしもし？はい…はい…いえ…遠慮しますわ…俺は鷹邸派なんで…』

翔は大を見ながらニヤニヤして電話の相手と話し終え携帯を切った。

大『おいおい…俺がいつ派閥作つたよ？』

翔『俺が作つたんだ…今な…』

里香『電話誰やつたん？』

翔『三年の松岡…No.3の派閥の頭だ…』

太一『翔さんを勧誘してきたんですか！！？それで翔さん断つたってことですね…』

太一が興奮気味に太一に聞いた。翔は頷く。大は呆れ顔でため息をついた。

大『あのな…俺は頭って自覚もねえし、派閥作る気もねえの!!』

眉間にシワを寄せながら言う大に翔は真剣な顔になり大を真っ直ぐに見た。

翔『大…俺はおまえに会った日からおまえしかいないと思ったんだ。四大悪高を統一する奴は…』

大『はあ?』

翔『四大悪高を統一した奴は今まで一人もいないんだ。俺はおまえに命預ける!だから…一緒に統一してくれ…!!』

翔は正座をすると土下座をした。頭を下げる翔の姿は小さいながら迫力満点で他三人は黙り込んだ。

太一は大と翔の顔を交互に見て緊張して何度も瞬きをし緊張をほぐした。

大は翔を見てタバコをくわえた。

大『帰れよ…』

里香『大!!!?!』

翔は驚いて目を見開いて大を見た。大は翔と出会う前の冷たい顔になっていた。

太一はおどおどしながら恐怖を感じて里香の後ろに隠れた。

翔『大…？』

大『帰れって…』

翔は何も言わずに大の部屋を出て行った。大は表情を変えずに翔が出ていくまでタバコを吸い続けた。

里香と太一は慌てて翔を追いかけた。

大は一人になった部屋でボタンと仰向けに寝転がった。

…結局俺は翔にとって友達じゃなくて統一の為の道具かよ…

クソ…

結局俺には友達なんて出来ねえんじゃないか
・
・
・

9 章

第九章【統一へ】

里香は翔を追って外に出た。太一も一緒に翔を追う。

里香『翔君…大も本気で怒ってる訳じゃないんやと思う…!!なんか…ごめんね?』

里香はやつと翔に追い付くと必死に翔に言った。

翔『大丈夫…怒ってねえから。ただ大はなんか気に入くわなかったんだろうな…』

翔は意外に冷静に笑って見せた。

翔『多分あいつは派閥とかが嫌いなんだろう…それで機嫌悪くなったんだよな…』

里香『そうかも…』

二人のやり取りを聞いて太一がおずおずと口を開いた。

太一『違うと思います…大サン…悲しそうな顔してました。』

翔『悲しそうな?』

里香『なんで悲しいん?』

里香は翔と太一とそのまま別れると大の部屋に戻ってきた。

里香『ただいま。』

大『…』

大は相変わらずムスツとしている。里香が帰ってきてても顔さえ見ない。

里香『大…なんでいきなり翔君にあんなこと言ったん？』

大『…俺も分かんね…ただ俺は翔にとって統一の為の道具に過ぎないのかとか考えたら…胸くそ悪くなってよ…』

大は気持ちを落ち着かせようとタバコを思いっきり吸い込んだ。

里香『…大…』

大『独りよがりだったみたいだ…友達と思ってたのは俺の方だけか…』

里香は大の気持ちがかかるような気がした。中学校の時も大の側には何人もの生徒がいた。しかしそのつるんでた生徒は大の強さが目当てでつるんでいるようだった。

無敵の大についていれば不良の間で自然に名が知れ渡る。

大も薄々それが目的で自分とつるんでいることを分かっていたのだ。

里香『…でも翔君だって大を道具だとは思ってへんと思うけどなあ？』

大『…わりい…その名前は一時俺の前で言わないでくれ。』

里香『…』

里香は寮の門限がある為荷物をまとめて帰る事にした。

大『送ってくぜ?』

里香『いい…不機嫌な大はみとおないし。』

大『…』

里香『じゃあ、またなあ…』

大は里香の後ろ姿を見送りながら不機嫌で悪かったと謝った。里香にまであたることはなかったのだ。

事件が起きたのは大と翔が言い合いになってから一週間後だった。

鬼多高校内で大量に女子生徒が襲われた。犯人は目星がついていた。大以外の鬼多高校を3日前に統一した新しい勢力町田組だ。

大がそれを知ったのは太一からの情報だった。

太一『町田組は中級軍団が提携して出来たグループです。本来なら鬼多高校の頭は大サンです！だけど…大サンは統一とか興味ないから町田組が調子に乗ってるんですよ！』

大『なるほどなあ…女襲って何になんだ…』

太一『大サン…あれ里香サンじゃないですか！！？』

里香は息をきらせながら走ってきた。

里香『大．．．早苗も…襲われたの．．．もうこの学校に女子の居場所はないわ…寮内でも襲われた子がいっぱいいるの．．．』

大『何！！？』

太一『このままじゃ里香サンも危ないですね！！大サン固まって一緒にいた方が…』

大『早苗サン何処いるんだ？』

里香『寮！！案内するわ！！この状況だから寮母も入寮許可するはずよ！！！』

大と太一が部屋に着くとそこには変わり果てた早苗の姿があった。下を向いてブルブル震えているのが分かる。

里香『大と太一くん連れてきたわよ？安心して？』

里香の声を聞いて早苗は少し微笑むと再び瞳から涙を流した。力なく早苗は大を見た。

『鷹屋敷君…初めまして…早苗です…前から知ってたんだけど話すの初めてですよ？』

大『あ、ああ…初めまして…』

大の中は怒り狂っていた。大の一番嫌いなことだ…男が女を襲う…

早苗の傷ついた顔を見た大は女の子の弱さを実感したと共にこのままではいけないという思いを強く持った。

大は何も言わずに早苗の前に座った。

大『必ず町田組は潰す。それまで俺が必ず守る。』

早苗『…鷹屋敷君・・・／＼』

大は自分がすべきことを頭の中でまとめた。

大『太一、ちょっと二人と一緒にいてくれ。ちょっと出てくる。』

太一『はい！！命にかけてもここで二人を守ります…！！』

大は何も言わず寮を出ると真っ直ぐに翔のいる教室に行った。一応授業中ではあったが誰も話を聞いてない教室に大は入っていった。

大が入った瞬間にクラス全体が静まり返る。翔と翔の周りにいる仲間達も大を見た。

大「翔：俺と勝負しろ。俺が勝ったら、俺と組んでこの鬼多高を改めて統一して欲しい。」

翔「バカ：俺はおまえには勝てねえよ。分かりきった喧嘩はしねえ。そんなことしなくても俺はいつでもおまえについていくつもりだ。」

大「それじゃダメだ。ただ統一したんじゃ意味ねえ。俺が本当に芯から鬼多高を統一する。」

大は気付いた。自分が今形的には鬼多高の頭だ。しかし今の町田組が仕切る状況は見逃せない。

翔「じゃあどうすんだ？」

大「このクラスの不良全員でかかってきてくれねえか？俺に膝をつかせた奴に頭を譲る。だが俺が全員倒せたら俺についてきてくれねえか？」

大の発言にクラスはざわめいた。倒すのではなく膝をつかせただけで頭を取れるのはかなり魅力的な話した。

翔『…何言っても無駄だな。よし、みんなでグラウンド出るぞ?』

大と翔のクラスメイトはそろそろとグラウンドに向かった。

襲われた女子達は警察に言えば世間体が気になる。学校側も見えてみぬふり。鬼多高は今荒れ放題だ。

こんな腐りきった学校…
俺が変えてやるよ…

グラウンドに向かう大の表情はまさに鬼人だった。

10章

第十章【鷹邸派】

グラウンドに大を囲んで翔達のクラスの不良達が集まった。

翔『今全員で20人いる。一辺にかかって行っているのか？』

翔が吸ってるタバコを地面に捨て足で火を消しながら問いかけた。

大『ああ…一辺に来い。』

翔『フン…みんなそういうことだから生半可な気持ちで行くなよ？
知ってるだろうけど…鷹邸大は……強いぞ？』

学校はちょうど放課後を迎え、校舎の窓から生徒達がグラウンドを見学している。

町田組の頭の町野国弘と田原正志も女子生徒を強引に従えながらその様子を屋上から見ていた。

町野『鷹邸大が動き出してゐるぜ？』

田原『クソ…あいつ統一に興味ねえんじやねえのかよ！！』

町野『いくら鷹邸でも相手は20人…勝てないだろうな…一匹狼もキツイなあ…』

田原『バカ…もう勝負は見てんだよ…』

町野『だから棗翔達が勝つてことだろ？』

田原『……反対だ…』

町野『……！！！！？』

田原のまさかの発言に町野は驚きを隠しきれず再びグラウンドを見た。

翔『いくぜ？大……』

翔のこの一言で20人の不良達は一気に大に襲いかかった。見ている生徒全員が大の敗けを確信していた。

大は次々に襲ってくる拳を手で神業のごとくはらいよけ、一人一人確実に溝や肝臓などの急所を的確に殴り倒していった。

翔以外の全ての生徒が倒れるのに10分はかからなかった。

翔『俺は一对多はやっぱりどうも気分が乗らねえ……タイマンはね。』

大『…そう言うと思ってたぜ…』

翔はニヤリと笑うと真顔になり大めがけて走り出した。翔が大の懐に入り右の拳をつきだすと、なんと大の顔にクリーンヒットした。

当たるはずがないと思っていた翔はあっけにとられた。

翔『!!!!!?』

翔には大がわざとよけないのが分かった。

翔『なんで避けねえ?』

大『おまえには全て受けてから勝ちたい…』

翔『大…』

大『だから気がすむまで殴れ。俺は殴り返すが、絶対避けはしねえ。』

翔『ハハハ…だからおまえはやめらんねえんだよ…』

翔は笑った後再び真顔になり大を殴り始めた。

翔…わりい…

俺は本当はおまえが俺を道具に見てねえことも分かってんだ…
本当はな…

大は殴られながら優しく微笑んだ。翔のパンチが10発程入った後、
大は翔の顔を一発殴った。

その一発で翔は気を失いその場に倒れた。

大は回復してきた他の不良を見回した。

大『俺についてきてくれるか？』

まだきつそうな不良達はなぜか清々しい顔をした。大の圧倒的な強さに、悔しさよりも快感を覚えたのだ。

『大将、頭とってくださいよ』

『頼みますよ...』

『なんなら一生ついていきますよ...』

みんなの言葉に大はホッとした表情になりありがとくと小さく礼を言つと去っていった。

この時、大率いる鷹邸派が正式に結成された。

大が早苗と里香と太一がいる女子寮に戻った。
三人とも無事のようなのだ。

太一『大サン!!!!!!』

里香『どうしたん？その痣…』

大『翔にやられたんだよ…』

大はタバコに火をつけて笑いながら言った。

翔という名前を聞き早苗は少し顔を赤くした。

里香『はあ？まさか・翔君、町田派に・！？』

大『バカ…ついてきてくれるってよ俺に・・』

太一『大サン…じゃあ？』

里香『統一してくれるんやね？』

大は何も言わずにふつと微笑みタバコの煙を吐きながら小さく頷いた。

その様子に太一は目を輝かせた。

太一『俺も…俺も弱いけど・鷹邸派に入れて下さい！！！』

太一は自信なさげに大を見ながら言った。

大『統一しようとする以上、喧嘩はつきもんだし、2、3年とも張り合わなきゃなんねえ…大丈夫なのか？』

太一『…やります!!俺、大サンについていけるだけで嬉しいんですよ…』

大『分かった…ありがとな。』

煙草を吸い終えた大はムクツと立ち上がった。

大『太一、行くぞ?』

太一『何処に…ですか?』

大『これ以上被害者増やすわけにはいかない…見回りだ…』

太一『はい!!お供します!!』

里香が慌てて大の前に立ちはだかった。

里香『うちらおいてけぼりなん??.』

大『…そつか．．寮も危険だっただんな．．．』

大は頬をかきながら言った。

太一『やっぱり俺残りましようか?』

『その必要はないぜ?』

里香『翔君!!?』

大『おまえ．．．』

翔はまだフラフラする足取りで部屋の中に入ってきた。

翔『俺がいるから行ってこい．．』

早苗は初めて間近で見る翔に顔を真っ赤にして俯いた。

翔『大、もう被害者出すんじゃないぞ？』

大『ああ…』

翔の頭は三凶に襲われた遥の姿が蘇った。

大と太一は女子寮から出ると早速見回りに行った。

翔は大に殴られた所を擦りながら里香を見た。

翔『…一発だった。』

里香『？』

翔『あいつが俺に繰り出したパンチ…一発で気失ったんだ…。』

里香『あ、あの…なんか…ごめんね…。？』

翔『あいつは、大は、本当大きい人間だな…。』

そう言った翔の顔は清々しい表情で里香は何も言えなかった。さっきまで殴り合ってたはずなのに翔の顔は大に対する友情で溢れている。

男の友情の不思議さを感じた。

翔は早苗の顔を見た。

翔『里香ちゃんの友達？』

早苗『は、はい／／』

翔は早苗の雰囲気です早苗が襲われたのを察知したのだろう…

ずっと立ち上がり早苗の手をとると自分の胸に手を押し当てた。

早苗『！！／／／』

翔『怖かったな…？もう安心しなよ…？』

翔は優しく優しく笑った。

里香は普段の翔からは想像できない表情に驚き無言で翔を見た。

早苗は呆気にとられた表情になったが翔の何とも言えぬ温かな表情と、しっかりと握りしめられた手に感動してしまい、涙を一筋流した。

翔『おいおい、泣くなよ?』

早苗『すいません．．／／／』

翔の小さな体と小さな手は早苗の心に付いた大きな傷をゆっくりと治していくようだった。

大と太一が体育館周辺を見回っていると、十数人の男子生徒が前に立ちはだかった。

大『なんか用か?』

『鷹邸大だな?俺達は町田組幹部だ。派閥を作ったそうじゃないか?』

大『そうだ。今鬼多は腐ってる。真から統一するんだ．．てめえらをまずはぶっ潰すぜ?』

大は傷ついた早苗の顔を思い出したせいかすでにキレる一歩手前だった。

太一『なんで女の子達を襲うんですか!!?』

『つつかおまえ誰だ?なんでって、そりゃあ快感だからだ・・嫌がる女を犯す・・これ以上の事があるか?』

幹部達は笑いながら言った。

この態度に大の堪忍袋の緒がキレた。

大『腐れカスが…』

普段クールな大があまりにも怒りを露にしたので太一は少し驚いたが、いじめられっこだった自分がこんなに怖そうな不良に囲まれて

全く怖がってないことに一番驚いた。

…怖くない…

この人の横にいるからだ…

大『太一、いくぞ。』

太一『はいッ!!』

町田組の幹部達は大の強さを想定してかバットを一斉に持ち大達に襲いかかった。

大は太一の前に立ち太一を守りながら闘った。

クソ…

武器を持ってたとはな…

太一『大サン、退いてください！！俺、大丈夫ですよ……』

大『おまえ……』

大は戦いながら太一の顔を見て驚いた。そこにはいじめられっこの面影はなかった。

大は太一を庇うのを辞めて思いっきり幹部達に攻撃を始めた。

太一は弱いながら逃げずに闘った。と言ってもほぼ一方的にやられた。

しかし、大の圧倒的強さ二より間もなく喧嘩は終わった。

太一は地面に手をついた。

大『大丈夫だったか？』

太一『…初めて……喧嘩しました。』

太一は頭をバットから守るときに出来た腕の傷を撫でながら言った。

大『おまえ、強かったぜ。』

太一『大サン……!!』

大は太一にニッコリ笑いかけるとまた何もなかったかのように歩き出した。

太一も大の後を再び歩き始めた。

大サン……

俺が強かったんじゃない．

大サンがいたから俺はこんなに殴られたけど怖くなかったんだ。
俺はこのでっかい背中に一生ついていきます…。

太一から見た大の背中はいつにもまして大きかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4140c/>

危険な太陽

2010年12月5日15時15分発行